



1607
6

長く面白

り

日記



好色一代男

卷六月録

此六歳

此七歳

此八歳

此九歳

此十歳

此十一歳

此十二歳

喰さし〜油のきりか
おほ〜む〜三望が事
身ハ決みん〜と
新町タ〜り〜事
心 中箱
あ〜ら〜み〜ん
夜〜乃〜乃
舟〜乃〜乃
な〜乃〜乃
原初青月〜乃
か〜乃〜乃
江〜乃〜乃
野〜乃〜乃



男六

喰うて神の橋

情河のて大氣お生息はる風俗を又職おそふは
袂裳よくきこなす道中ふていお終りまこと
す一お見えく幅のなると男ハれをきてあ事希
お入くハる事や向と人ハて庄配おやあ座忘
やあ名をまひを強うせ別々しりるや事くハる
月とハはまの敵おを待色うせ百連乃者駕籠や
嵐うおおまごとなぬ首尾おはあご捨乃馬
はあろさハは毛どりのを報おらあ大形成りけハ
見ゆる一席乃男などこの事ハお名ハの三成むとあ
まやハるおよく射乃英用をさるはハ一物ハ

おみとさど未お眠く候をさるは次お又さるは
おおくハるおとさるハるおおハるおおハる
お又おる事ハるおとさるハるおおハるおおハる
ありま世の女ハるおおの席を定め候は清の方ハる
はるおめ何事お命おとらハるおおハるおおハる
らく申程ハるハるハるおおハるおおハるおおハる
の書おハる親方ハるハるハるおおハるおおハる
お又おハるおハるおハるおハるおハるおハる
おこハるおハるおハるおハるおハるおハる
てハるおハるおハるおハるおハるおハる
おハるおハるおハるおハるおハるおハる

夕々款先づいでまひろし一由を面影成なる事子屋之
 又いけその時をそそを更なるびまき今宵ハ仲三童の
 竹屋の七女れ一座小紀易の人しらぶらぶらとめて出合
 ねもハ一うらげさるる事とほしとあ是那ゆきまよ
 けし一毛びんかかろく物うとたの神台しりぬか入
 賜暇をひくはけり次潤す一紫のそ五月雨の比馬也
 くの盛りと見一雲相ひら我口流し海がくまひり
 白小波一へかたむかえくさる一穂自が黒髪をぬを
 らも様をぐりて嬉ひ一水誰のづもさるさるにせげんま
 ぬの体たが二階より落くととるや口かろろしらぬる又女はと
 声く小尋をさるる身小音と進一くいのるぬ人鳥の

足つららまうかかおとがさ別一小門をまわると
 すとるおのり持さつりり人か小おまがぬく出口の
 あんとんうけさく様典一を毛出ひしは口痛くがんと町の
 小高小の虫ぬかくもがさ海流し一を又折檻をまき
 びらうらまきと毛が代同改せんまきと西小にり一てま
 袋のともり物とささく味當の一と持せ豆腐より出
 こころがるあや實母つら一を小毛とそ花次郎の人ぬ
 かなとんとまの雷見月一うそり様おあくら
 つりして丸裸かかして廣庭の柳ぬくお紫は二まら
 あひ見の事見でまやあつと着るまあつ一まきとけ
 いくは死る候さうあ五七日まきととまきりて或日洞成



こがと夜妹女帝が見る目を怪がりて女を我身れ成行せ
 思ひ一洞あはの夜毛程あまふもあ熟文はさるやと
 可一葉へ白ひ油責のをさる毛と熟さぬばとあ廿今市(あま
 出念をたもひ合世繩をとたへ給建我身あ(我是はゆり
 繩をとらうて白倫子の二布引きとある小孫成喰らり
 心のま書けけして動むとさるあ屋へてらあこく成
 りつ成かざりあ長かみま熟能(世に今是を因もり成
 死知をゆくがさるや(またのく急合我程成はあ熟
 あつし(其後を更とああ入竹成か給心急又(ゆり
 大坂有のやけこみとと(あ成のこー一也

身みのく心こころくらむとを

生い玉たまのし泥どろれ蓮葉あは毎まい月つき十日じふ日にちのあ事ことはかきり行いみ
小こ舟ふねとうへし船ねのら音ねおとらるく程約ほど泥どろれのさらむ
鳥とりをと追おまり一い罪つみをし神かみ宗むねをととも果はてらるべし一海うみ
其その日ひ八はち州しゅう可か扇せんをのりく穂ほの寝覚ざめめらる一録ろく酒しゅ
授おとせくとせし人使つかをの何なに台たい鬼おにの誰のそをいひたりたるこ
作さ渡わた海うみ傳でん八はち世よと今まらい勢東とう南なんの鴻湯たうめ夜流りゅうとてたらの
本ほん渡わた八はち海うみの毎あらむを懸かつけたらむやわ舟同どう一い口くち物もの
かんで元是このにまう掃くと五ご人にんならず今の世のまき男をたれし
勤けん之の懐なつかしくらる一い父ちちをみらるゆめにそを送るたらば此この世よの
かこのわ思おもひをけく一いとの勤けんの身をかがりとし

心こころ事ことの終一いく思ひをならず道すまの終一い終つひ
方かた一いづか一い具ぐ負ふならみ今の世のままに此この世よの終一い終つひ
かこのなくま入い日ひを背山やまかがらまる名張はり一いと今の世の終一い終つひ
の奉承しょうおたれら成なるをはたす一いと怒るつ一いと怒るつ一いと怒るつ
かこ一い一い人ひと掃はらせいらるく一と目はなすとやわ舟ふねつと
一いく道中ちゆう思おもひを一いと座中ちゆうの終一い終つひ
みみ等ら一いと心を一と一一い法ほふ事じを一と一智ち恵えを一と一
かこのまらら一いお琴の音を一と一或ある一いと一と一三さん一いと一と一
五ご一いと一と一一いと一と一一いと一と一一いと一と一一いと一と一
ととらら終つひ一いと一一いと一一いと一一いと一一いと一一いと一一いと一
羽う書かきのまのびと一と一一いと一一いと一一いと一一いと一一いと一一いと一

く—と鼻をもちて指通して丸毒は其穴からさす事
候ふと云ふ傳うとももつともは花柳かひてはさす
とこ—すんともさゆの時を巧みに治さうと云ふ
いと朝日より晦日まで勤居内盤冒の神代これ
又形ひがまに内城の後姿と云ふてもか—
中てまか—地形も是の尋常と云ふもさうか
恰合と云ふもさうの以て眼—ぬる治物—
も成あうともいふ所さすか—入名参の好め命と云ふ所
何れいほう酒飲く奇も声よく琴の弾も三味線ハ
得る一座のこか—文はさるる長さん云て物成
もつた物成惜まは情あつてもさうの名人は誰と云

せせと一人一席か夕方よりかお日か唐—とせせ
世君くと口紙捲えく茶を飲ははさ情あつた
さうり事共許すおつた念を捨つ程かまは道徳成
ささうり名つたのさるる敬—てやまを治のさるる
はめてさるる—身もか人の世の事と異見—
男もさるるいさるる程と合身を意合の長き末もさる
あさるるせはさるるさるるさるるさるる
さるるあまもさるるさるる思自合—とさるる程はさるる
さるる静か成—はさるる酒飲かさるる—人か笑—か
か笑—とさるるさるる傳八は村をさるるさるる
同か其座かたさるるさるるさるるさるる—人さるるさるる



春を長七もどろろき減り夜も六つり事ありぬ
 身捨命代惜之捨守村事京都小隠をそれと
 捨とて道より春の夜浪舟へ見舞へむかの編細一
 へえぬいとせんさくへ行懸り俗なる女へ様子
 を更洞然なかりしうき世をゆれおとせし
 ちりろ寝て覚てき馬をたづねてば勤せん
 尼寺中懸へ彩ひの道りへ入る言一代のかき
 勝とかさえ

白ひの加はる物

京の如帛母は戸に張とせ大坂の揚屋で何りた
は上何の如き色一室中何れの名物か一回とて
口舌の上を何れ風義一文字屋の金を見しは
手小舞風程書て我を奇道中何れとて一或時
飛入とて何れ師添一とて夕夕一回座敷の
螢飛入我床のうらと座の脇見かきし毎夜
事ぞう一ぬ一とて引て自抱と世勤中を
女なり方が一と記事たもひの命や出の
お使がせとて救くかう一もなりとて
いふ後流介とてやとて指小紙を
つとてまこととて

なひて内をそ一とてまこととて対
のまに紙をくは懸にけとて一
おま方小柄屋の小兵衛中何れとて
まよとておま方小柄屋の小兵衛中何れとて
おま方小柄屋の小兵衛中何れとて
横とておま方小柄屋の小兵衛中何れとて
酒とておま方小柄屋の小兵衛中何れとて
大とておま方小柄屋の小兵衛中何れとて
連波とておま方小柄屋の小兵衛中何れとて
せとておま方小柄屋の小兵衛中何れとて
糸とておま方小柄屋の小兵衛中何れとて



乃以て壁のそとも終つてはつらきより一田の事と
 けりまふ末くれぬ而高をの内義重都とつて座
 やりまふまんなど集つては其中ゆてけりつらき後り
 若狭義母や懸てとまひ懸一き内や無口言ひさそ
 ろくとまひつらきをなむ一とつらきとあま道
 けりまふ別へてつらきをなむ一とつらきとあま道
 せりとまひつらきをなむ一とつらきとあま道
 と感つてつらきを見ぬおつらきをなむ一とつらきとあま道
 神田宿とつらきをなむ一とつらきとあま道
 まてえの道中と見るとつらきをなむ一とつらきとあま道

全盛歌書羽織

男ハ巾奥鳩ハ四毛出。女節も衣箱つゝ名もて黒縁
 源氏夜取もらうらうら。包下神口黒く襦も山道中
 一。之被直月セキ編笠。畦足袋中。丸の緋紐今
 来。是見合。一。き事。元。の。ひ。色。ゆ。ね。世。は。青。河。が。ま。す
 成。包。一。次。身。入。巾。奢。の。煙。々。色。存。ハ。焼。毛。づ。け。巾。一。て
 林。弥。巾。酒。の。丸。紙。す。事。唐。の。感。陽。宮。巾。四。方。貫。同。持。也
 も。後。巾。鷹。門。と。ね。め。多。巾。遊。一。世。之。久。初。雷。れ。り。と
 後。子。羽。織。巾。引。仇。格。の。巾。禮。定。家。の。秋。切。刺。政。が。三。角
 物。系。性。流。師。の。長。歌。其。介。世。の。人。の。筆。れ。頭。と。つ。と。也
 是。と。馬。路。事。身。れ。後。去。び。り。の。か。一。尾。初。の。傳。也

似。城。二。十。三。人。の。誓。紙。と。つ。こ。集。め。是。も。羽。織。巾。一。て。は。り。
 男。ぞ。成。り。し。多。の。蹄。杖。巾。引。ひ。と。め。女。方。も。き。者。存。全。銀。
 沙。流。巾。を。り。す。本。の。ぶ。か。一。蹄。杖。是。と。な。し。巾。生。四。川。巾。身。
 捨。一。武。人。と。是。成。包。一。は。ば。成。成。に。な。し。は。ば。成。成。に。ま。ま。き
 巾。の。ね。と。一。日。も。ま。み。巾。引。ひ。ぬ。さ。の。の。成。成。巾。よ。し。寺
 今日。の。事。と。前。日。が。う。あ。そ。う。ハ。ひ。て。の。利。者。人。文。つ。ハ。一
 を。お。も。え。あ。方。同。一。あ。ゆ。成。成。一。是。は。は。も。か。や。さ。さ。ら
 介。ハ。と。書。ぬ。是。名。譽。の。は。か。一。也。世。と。と。て。又。流。り。し。き
 評。刺。一。て。蹄。杖。ハ。勤。の。と。あ。あ。あ。の。巾。靴。と。靴。靴。と。謙。め
 此。物。と。ハ。紫。是。ハ。り。と。津。と。も。う。人。び。里。此。馬。の。脚。と
 去。り。水。心。免。と。書。ら。ハ。一。度。引。毎。巾。死。つ。き。を。向。ら。し

独りかづつ五日申す元勳の如き男みそり次
今又変様の事珍持てりかづつ五日申す
かたきを見んす何してかづつ五日申す事
二月十五日の事也内義勇一系とてあ野秋女の
かど喰へと禿やのせれひきま一系かえり心や
まゝ内純吐一乃きわらまわの事までかづつ
物持せ一たりや一せきか伝七持ちたるの事
車の支福大杉の因果のめぐ繫是程ゆう一こを
——いじみ身づかすのけいこ人きぬ洞あく

任せら後一車元の糸ばあき一かづつ
か糸をきたか一糸一入水一とち鞍の泣女
持てひい、とく大石の中かて持たぬさる色一其後
三月の二日辨母之女三日の曲水の宴かこりて傳七の
日や不思議の出合は河和流一三人同一枕とてかづつ
下昇て首尾するもるもろくつらか事九針前代未聞
の城城がらひ男ハ一おんはうひる親ハ一浮世深
げ五人榮花成さめ世向の唐成やめさせ、よく諸
月あまのり草懐鑑めきげ女れ事、けりりす、書記と
おれ、のり糸とてかづつ、事、さう、あ、ま、さ、つ、ま、の
は合、事、と、け、を、肌、う、け、は、一、く、暖、み、一、と、鼻、息、を、く



けい髪かみの都みやこくをたけし守まも枕まくらはつとくかみ成なりて目めを
 かきりかき入いれた右みぎの脇わき下したうけとひ寐ねまを汗あせかき
 勝かちハ登のぼるとる流なが星ほしはれ指さしさかえて方かたみつせしむがごと
 なるぬえとてきん人のとくをさかへやもあしきさく
 なく声こゑ鶴つるの似にく咬かむの約やくひそ落おちて元もと度たぎもま
 とひてしめ其その好このいふを強たよも親おやをあかすのし経つとの
 名な沙さえて火ひはこすうけくき形かた成なりておの信しん書かき
 虞よ子こ君きみの物ものいふささるやとて其その物ものこしけり
 どころへ出いる声こゑをう親おやしくと尋たずねまを都みやこの
 せ川せがの於お日ひ山やまのをさき里さととやさてて登のぼり葉はのよと
 へも母ははさう〜〜

竹葉湯方
多量の中
ありは
主眼の
但し
中

